



新たな「人と自然の博物館基本計画」

平成20年3月

新たな「人と自然の博物館基本計画策定委員会」



目次

I	基本的な考え方	1
1	人と自然の博物館のこれまでの実績	
2	変化する時代の潮流、現在兵庫県が抱える課題	
3	基本構想の要旨	
4	ひとはくに求められる機能等	
II	これからの事業活動方針と事業展開方向	5
1	これからの事業活動方針	
2	これからの事業活動手法（「展示」から「演示」へ）	
3	これからの事業活動の展開方向	
III	「演示」を支えるプログラムと担い手	10
1	演示プログラムのねらいと事例	
2	演示プログラムと担い手のかかわり	
IV	施設計画	18
1	新館に求められる機能と場	
2	新館と本館の役割	
3	新館の必要な施設（構成する主要ゾーン）	
4	施設の配置計画	
5	新館の空間イメージ	
6	新館整備予定地の概要	
7	施設の位置及び周囲との連携	
V	運営方針	25
1	担い手の育成	
2	継続可能な運営体制	
VI	今後の進め方	28

I 基本的な考え方

1 人と自然の博物館のこれまでの実績

人と自然の博物館（以下：ひとはく）はこれまで研究系博物館として、資料や情報を集積し、それらに基づいた研究を行うとともに、行政支援や地域づくり活動の支援などの数多くのシンクタンク活動を進めてきた。さらに、平成13年度以降、セミナーの数を大幅に増加させるとともに、アウトリーチ活動を拡充すべく「ひとはくキャラバン事業」を立ち上げ、県下各地で生涯学習の場を広く提供してきた。同時に効率的な運営を念頭に置きながら、県民サービスをより拡充すべく努力を重ねてきた。

2 変化する時代の潮流、現在兵庫県が抱える課題

しかし、開館時と比べると、多くの人のライフスタイルも変化し、自然との密接なかかわりが失われる一方、地球温暖化をはじめとする環境問題が深刻化し、環境保全に対する関心が世界的にも高まり、人と自然のあり方への理解が尊重されはじめている。

また、兵庫県のみならず全国的な都市への人口流出、農山村の過疎化・高齢化により、集落が崩壊し、自然とともに暮らし、維持してきた里山や田畑等の豊かな自然が失われていく状況にある。

その中であって、近年まちづくりや地域づくりにおいて、地域の環境を守り、生物多様性を保全することが全国的な趨勢となりつつある。地域環境の保全は、局所的な地域の生活環境を良くするだけでなく、広域的な国土保全や環境形成にもつながり、生物多様性の保全は、貴重種や生態系が地域の貴重な資産になるだけでなく、観光振興や地域への愛着を高めていくものであることが広く認識されつつある。

さらに、平成18年8月には本県丹波市内の約1億2千万年前の地層から大型草食恐竜の化石が発見されており、世界的にも貴重な自然遺産となる可能性も高く、地球環境をはじめとする自然・環境学習の素材としての活用も期待されている。

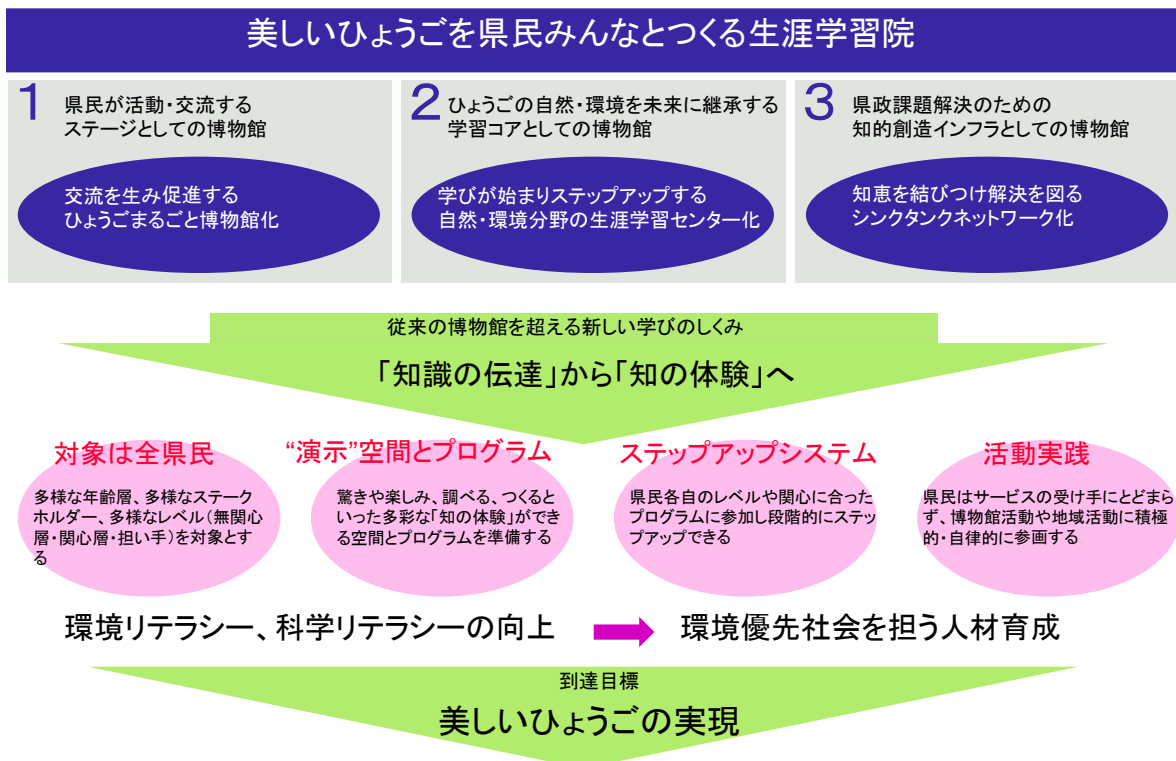
3 基本構想の要旨

上記の時代の潮流と県の課題を克服すべく、平成19年3月に新たな「人と自然の博物館基本構想」を策定した。そこで示された内容の要旨は以下のとおりである。

基本構想では、“美しいひょうごを県民みんなとつくる生涯学習院”を目標に位置づけている。すなわち、①県民が活動・交流するステージとしての博物館、②ひょうごの自然・環境を未来に継承する学習コアとしての博物館、③県政課題解決のための知的創造インフラとしての博物館という3つの新しい博物館像を提示し、この実現を通

して、従来の博物館を超える新しい学びのしくみを実現していくこととしている。

この活動の対象は全県民であり、驚きや楽しみ、調べる、つくるといった多彩な「知の体験」ができる空間とプログラムを活用しながら、参加者がスキル面でのステップアップを実現する。そして、様々な活動の機会を得て、技術を身に付けた県民は担い手として様々なプログラムの実践に携わる。この一連の流れにより、県民の環境リテラシー（＝環境に関わる資質・能力）、科学リテラシーを向上させ、環境優先社会の実現を担う人材の育成を図る。これらの活動と人材育成の循環が、究極的には美しいひょうごづくりにつながっていくものである。



4 ひとはくにも求められる機能等

基本構想で示された3つの博物館像（＝使命）を果たしていくため、これまでのひとはく活動の柱を継続しながら、今後、必要となる新たな機能、強化・充実する機能を本基本計画において整理した。これまでのひとはくの活動は、研究機能、資料収集機能、県民活動・交流拠点機能、環境学習機能、全県展開（アウトリーチ）機能、シンクタンク機能、管理運営機能等を果たしてきたが、上述したような理由から、既存機能の強化・充実及び新たな機能の整備を図っていく必要がある。

(1) 県民が活動・交流するステージとしての博物館の実現

県民各層がひとはくの活動に参加することを通じて交流を生み促進し、それによって全県土の活性化につながることを、すなわち県民活動・交流拠点機能及び全県展開機能の強化・充実、参画型学習支援機能の新たな整備が必要となる。

(2)ひょうごの自然・環境を未来に継承する学習コアとしての博物館の実現

県民各層の学びが始まりステップアップすることによって、自然・環境分野の生涯学習のセンター形成につながることで、すなわち環境学習機能の強化・充実、次世代育成機能の新たな整備が必要となる。

(3)県政課題解決のための知的創造インフラとしての博物館の実現

県民の間に蓄積されている知恵を結びつけ解決を図ることによる、シンクタンク活動のネットワークが形成されること、すなわちシンクタンク機能の強化・充実が必要となる。

新たに追加する機能

○参画型学習支援機能

来館者が調査・イベントに参画するプログラムを仕組み、自らが調査研究やイベント開催を体験できるシステムを創造する。

○次世代育成支援機能

自然環境や文化には 100 年先を意図した長期的な対応が必要であり、次世代のための自然・環境学習の場とプログラムを提供する。

強化・充実する機能

○県民活動・交流拠点機能

県民・団体が自主的に自然・環境に関する活動・研究できるための拠点となる場をつくり、活動と情報の交流、ネットワーク化を進める。

○環境学習支援機能

生物多様性の意義や地球温暖化など環境に関する課題を科学的に学習する機会を提供する。特に学校団体・市民団体が学ぶ場とプログラム提供を推進する。

○全県展開（アウトリーチ）機能

県内各地域や各自然・環境分野ごとに特性のある「もの」「プログラム」を用意し、各地でのキャラバン活動や調査研究などアウトリーチ活動への活用を図る。

○シンクタンク機能

収蔵資料・関連情報を広く一般に提供するとともに、専門的な学習、調査研究を支援する。また、地域が抱える様々な課題に対し、専門的なアドバイス、情報提供を行う。

継続する機能

博物館活動の基盤となる機能

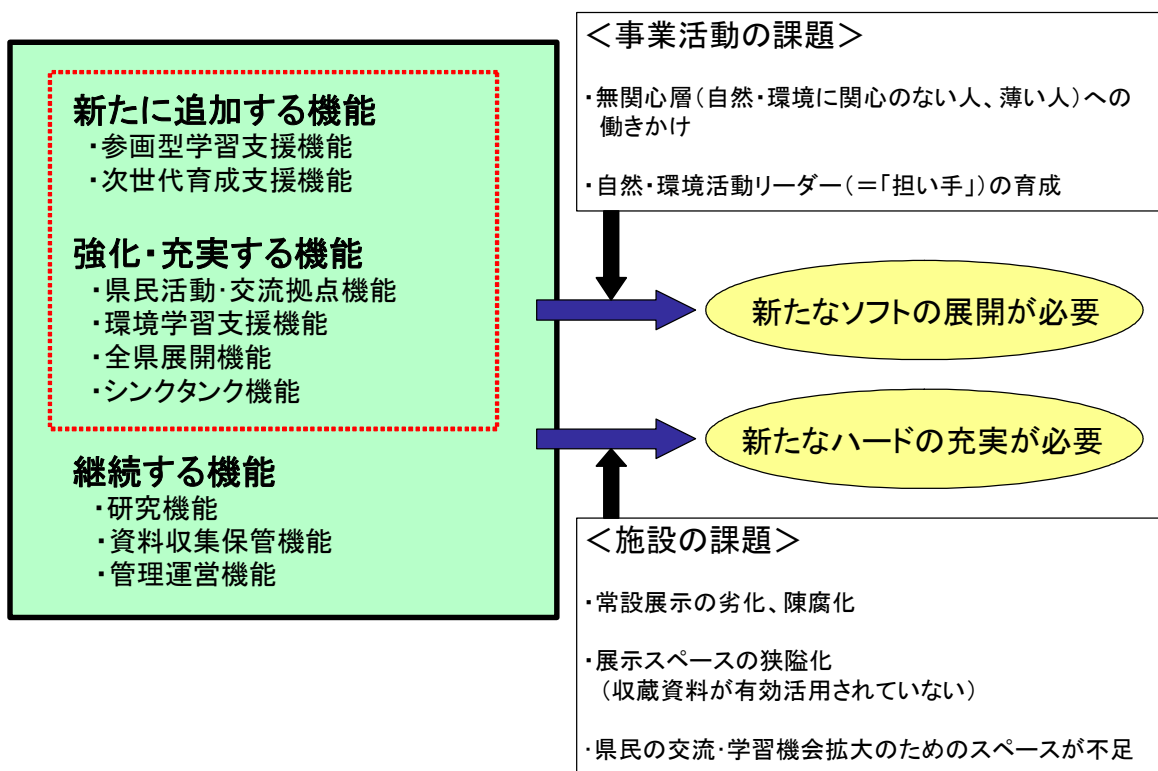
○研究機能 ○資料収集保管機能 ○管理運営機能

しかし、これらの機能を十分に発揮するためには、現在の常設展示が劣化し、その陳腐化が著しいこと、展示スペースが狭隘であること、県民の交流のためのスペースが不

足していること等の課題がある。

さらに、事業活動における課題として、これまで自然・環境に関心のない、薄い人（＝「無関心層」）への働きかけの強化、自然・環境活動リーダー（＝「担い手」）の育成が基本構想においても示されている。

これらの問題を解決するため、新たなハード整備とソフト展開が必要であり、その両面についての計画を次章以降で記述する。



II これからの事業活動方針と事業展開方向

前章では基本構想を受けてひとはくが果たすべき機能について整理した。この章では、この機能を実現していくための事業活動方針を整理したうえ、ひとはくのこれまでの活動の中で、博物館事業に対して関心の低かった人々の誘引に有効であった「人の介在」による事業手法（＝「演示」）について言及し、さらに演示を中心とした事業展開方向を整理する。

1 これからの事業活動方針

新しいひとはくにおいては、自然・環境活動リーダー等の協力を得ながら、ひとはくスタッフを中心に、セミナー事業、キャラバン事業等を深化発展させることにより、これまで果たしてきた県民活動・交流拠点機能、環境学習機能、全県展開機能、シンクタンク機能の強化・充実を図っていく。

1) 県民活動・交流拠点機能については、気軽に参加できるオープンセミナー事業の充実、県民が活動成果を持ち寄り発表する場の拡大等により、2) 環境学習機能については、生物多様性・環境保全の重要性について学ぶ企画展の開催、学校団体向けの自然や生物多様性を理解する体験型環境学習プログラムの充実等により、3) 全県展開機能については、地域の環境、暮らしや文化等の特性にあわせメリハリをつけた「キャラバン活動」、「地域研究員養成事業（地域の自然・環境活動リーダーを養成）」の実施等により、4) シンクタンク機能については、人と自然の共生に関する受託研究、貴重植物の育成・増殖事業の充実や環境配慮型の地域づくりをバックアップする活動の充実等により、それぞれの機能の強化・充実を図っていく。

新しい機能である参画型学習支援機能、次世代育成支援機能については、ひとはくのスタッフに加え、ひとはくの事業等に参加した人たちの中で、ステップアップしていった人たちが中心となり、自ら企画・運営して調査研究、イベント開催、学習プログラムの提供等を行ったり、幼児をはじめとする次世代の子どもたちに自然・環境の意識づけを行うことにより、その役割を果たしていく。

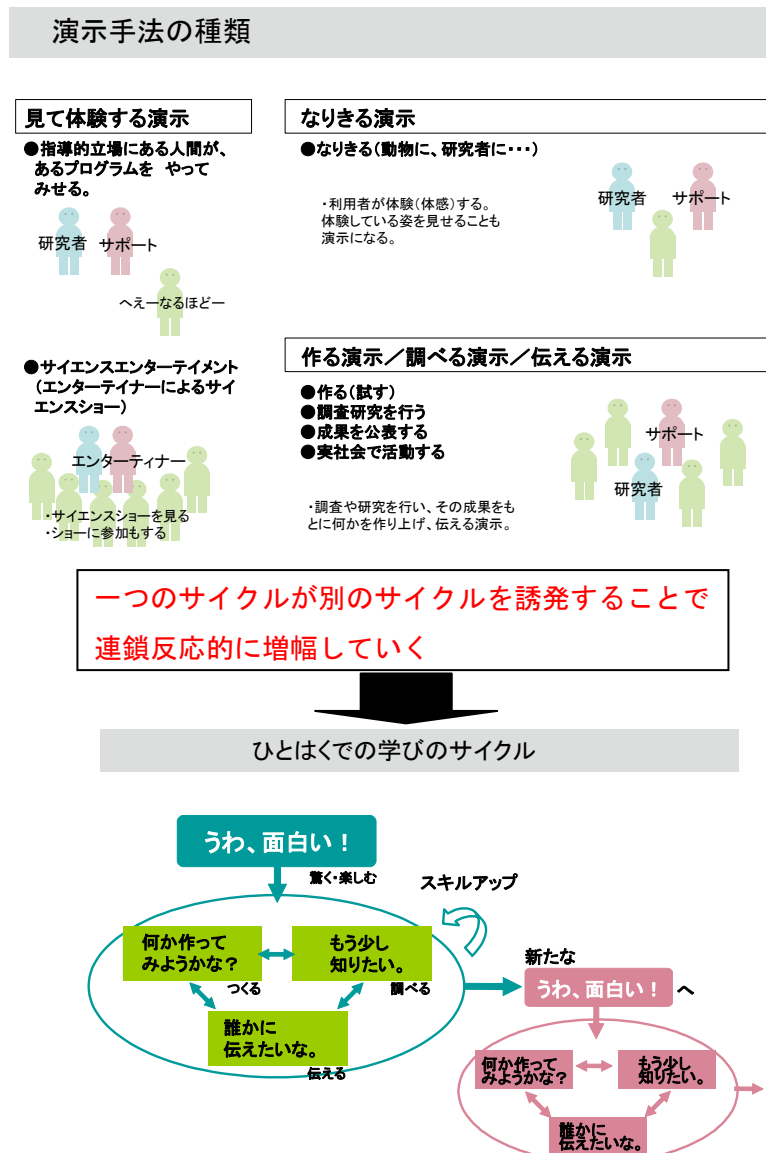
こうした機能の強化・充実、さらには新しい機能を発揮する上での事業活動手法について、ひとはくでは、これまでの活動の中から、「人が介在」した双方向のコミュニケーションに基づく活動スタイル（＝演示）が、県民等の学習意欲を高めたり、主体的な活動を促したりするなどの効果をもたらすことを確認しており、新しいひとはくの事業活動手法は、「演示」を中心に据えて展開していく。

なお、研究機能、資料収集保管機能については、専門性の高い研究員を中心にこれまでからも特色ある質の高い研究、資料収集を行っており、今後もこれらの機能を維持していく。

2 これからの事業活動手法（「展示」から「演示」へ）

これまでの「展示」による活動手法では、モノやことがらの理解は、利用者の見る、聞く、読む、触る等といった行動を通して行っていたが、新しいひとはくで活動手法の中心とする「演示」は、利用者とモノ・利用者と空間の間に「人が介在」し、モノやことがらを理解する手法である。「人の介在」によって、関心のない人・薄い人も興味を持ち、活動に参加しやすくなり、それぞれの興味・関心に応じて参加したり、いつもと違った見方ができるといった効果がある。

演示には、研究者や担い手などがプログラムをやってみせる「見て体験する演示」、利用者が体験（体感）する「なりきる演示」、さらには、利用者が調査・研究を行い、成果を元に何かを作り上げ、伝えるといった「作る、調べる、伝える」演示がある。見て体験する、なりきる、作る、調べる、伝える演示を通じて、「学びのサイクル」が生み出される。また、一つのサイクルが別の新たなサイクルを誘発することになり、「学びのサイクル」が連鎖反動的に増幅していく。



3 これからの事業活動の展開方向

(1) 博物館活動の様々な場面で「演示」による活動を展開

これからのひとはくにおける「演示」などのプログラムは、それを通して利用者がスキルアップできることを目指している。すなわち、ある分野において初心者である県民が、「演示」などのプログラムを体験する中で、徐々にスキルアップし、最終的に深い知識やスキルを自分のものにすることができるようになることである。

その中で、一部の人は、ひとはくプログラムの運営にも参加する“担い手”となることを目指し、担い手は博物館の展示やイベントなどのプログラムの様々なシーンで、自然や環境のこと、ひとはくのことを知らない人を誘い込み、関心をもってもらい、関心の度合いや技術を深めてもらい、ひとはくで活躍してもらおう新たな担い手を養成する。このようなプロセスを通して、自然・環境活動を担う人材の育成と次世代の育成を行っていく。

演示が生み出すスキルアップ

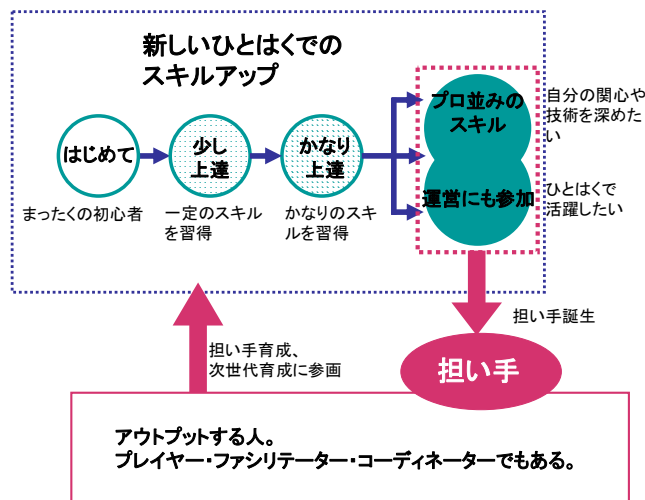
博物館のさまざまな場面で演示を展開

○自然・環境活動を担う人材(=担い手)の育成

- 無関心層の誘引
- 関心層のスキルアップ

○次世代の育成

- 学校環境学習支援
- 幼児の意識づけ



(2) 「演示」による事業活動を通じて交流を生み出す

「演示」は様々な交流を生み出すものである。交流には、「様々な人との出会いがある」、「いつも何かが起こっている」、「多様な“なぜ”が生み出される」、「自由に創造的に活動できる場がある」という大きく4つの特徴がある。

これらの特徴を踏まえた交流の場ができ上がる中で、多様な人が自ら学習・研究活動を行ったり、学びの場を提供されたりと混然とした賑わいのある空間が形成される。また、その空間においては様々な目的の人、急ぐ人やゆっくりとする人など様々な人が行き交う。この人たちが緩やかな関係をもって存在している状態が、ひとはくの目指すべき“交流スタイル”であり、ひとはくでは様々な事業活動を通じて、このような交流の状態を作り出していく。

<新しいひとはくが目指す交流スタイル>

① 様々なひととの出会いがある。

- ・多様な年齢、職業の人々がいる。
- ・活動している人たちのテーマも様々である。
- ・多種多様な人々と交流できる。
- ・刺激を受けたり、仲間をつくったりできる。

② いつも、何かが起こっている。

- ・いろいろなテーマを追求して活動する空間があり、人がいる。
- ・驚きや発見、変化を与える出来事が起きる。
(お祭り、イベント、事件など)

③ 多様な“なぜ”を触発する。

- ・多様な人との交流が学びへの第一歩
- ・なぜと思う気持ちを刺激する。
- ・なぜを探求するための場と道具とサポート体制がある。

④ 自由に創造的に活動できる場がある。

- ・自分も活動することができる。
- ・テーマが見つかったら、資料や機材を使ってとことん追求することができる。
- ・ひとはくを訪れる多くの人に見てもらえる。

(3) 「演示」による事業活動を全県展開し、ひょうご全体を活性化

ひとはくから提供される体験の場は博物館にとどまらず、各地の学校や学習拠点などで展開される。演示プログラムを通して、自然環境に関する新たな担い手が養成される。この担い手がまた新たに県民に対してプログラムを提供し、次々と自然環境のプログラムの経験者が輩出される。このような循環を“博物館活動の輪”と呼ぶことにする。各地で展開される博物館活動の輪は、ひとはくを核に県土全域で大きな循環を生み出す。ここで循環するものは、担い手などの人材、ノウハウや技術、そして熱意やエネルギーであり、この大きな循環と各地の循環がひょうご全体を活性化するのである。

また、各地の学習拠点の候補としては、ひとはくとの協働の実績がある多くの場所をあげることができる。ひとはくはキャラバン事業や地域研究員養成事業などを通じて、県下各地の学習拠点と綿密な関係を築きあげてきており、これが新しいひとはくにおける事業展開とひょうごの活性化において重要な拠点となるのである。

全県展開のための具体的なアウトリーチについては以下のような方針を進める。

①メリハリをつけたアウトリーチ事業の実施

これまでのひとはくのビジターは、半数が本館を中心とする事業、半数がキャラバン事業をはじめとするアウトリーチ事業の利用者である。本計画が最終的に目指している兵庫全域の活性化のためには、今後もアウトリーチ事業を継続しつつ、ひとはくにこれまで来館したことのない人（＝ひとはく未体験者）の誘引を図っていく。

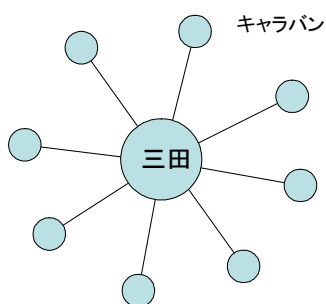
これまでのキャラバン事業は、10 県民局で同様のメニューで展開してきたが、ひとはくへの関心の程度や地域の現状がそれぞれの地域で異なることが明らかになってきた。そこで、アウトリーチ事業について、地域の実情や特性に合わせてメリハリをつけ、効果的・効率的に実施し、ひとはく未体験者の誘引を図る。

②重点地域の設定

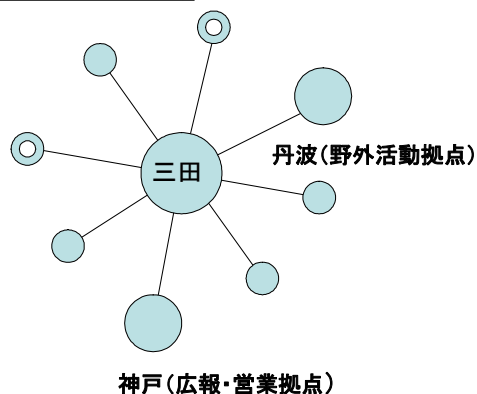
人口は多いが、ひとはくの知名度が低い神戸・阪神地域はひとはく未体験者が多い。このため、この地域を広報・営業の拠点とする。また、県民の関心が高い恐竜化石の発見地であり、ひとはく未体験者にとっても魅力的な自然・環境学習のフィールドとなる丹波地域を野外活動の拠点と位置づける。このように重点的にアウトリーチ活動を展開する地域を重点地域として、これらの地域と博物館を有機的に結びつけ両者の相乗効果が期待できる各種の事業を展開する。

重点地域の設定

従来のアウトリーチ活動



今後のアウトリーチ活動



Ⅲ 「演示」を支えるプログラムと担い手

本章では、2章の事業活動を支える演示プログラムとその活動の実施主体の中心となる「担い手」について言及する。

1 演示プログラムのねらいと事例

(1) 演示プログラムのねらい

新しいひとはくで展開する演示プログラムは、人が介在するという特徴を最大限に生かし、人材育成や次世代の育成に寄与するとともに、交流を生み出すという観点から、次の5つをねらいとして提供することとする。

① 幼児から大人までの幅広い年齢層を対象とする

県民各層の多様なニーズにきめこまやかに対応するためには、年齢層に応じて適切にプログラムを選択できることが効果的である。プログラムの提供に際しては、幼児から大人までの幅広い年齢層を対象として設定する。

② 学びの連鎖反応を誘発するプログラムを提供する

学びが継続するためには、学びが多様な“なぜ”を誘発し、次の学びへと連続していくことが効果的である。そのために、あたかも学びの連鎖反応を誘発するようなプログラムを提供する。

③ 自由に選択できる多種多様なプログラムを提供する

誰にでもとっつきやすく長続きするためには、個人の好みで自由に選択できることが効果的である。そのために、自由に選択できる多種多様なプログラムを提供する。

④ 担い手や他機関等との連携によってプログラムの多様化と深化を図る

広範な県民が学びの輪を広げるには、一人の学びが深まるにつれ、他の人の学びへと波及効果を及ぼすことが効果的である。そのために、担い手や他機関等との連携を通じて、積極的にプログラムの多様化と深化を図っていく。

⑤ スキルアップのためのプログラムを提供する

次の学びへの意欲が生まれ、さらなる興味へとつながっていくには、学びを通してスキルアップしていくことが効果的である。そのために、スキルアップのためのプログラムを提供する。

(2) 演示プログラムのレベル別区分

演示を体験する人のレベルに応じて、演示プログラムを提供する必要がある。

- ① 演示をはじめて体験する人に向けては
 - ・自然の不思議に驚きを感じ、自然に親しむ。
 - ・ひとはくに親しむ。
- ② 少しスキルの上達した人に向けては、
 - ・自然・環境に関する知識を深める。
 - ・複数の分野への興味・関心を喚起する。
- ③ かなりスキルが上達した人に向けては
 - ・調査・研究フィールドワークなど、自分で行動し体験して、知識や考え方を身につける。
 - ・ひとはくの標本や資料、情報を活用し、専門知識やプロの技術等を習得する。
- ④ プロ並みのレベルに達している人、運営にも参加できる人には
 - ・ひとはく及び大学、研究機関、専門家などのネットワークを活用し、大学院レベルの本格的な調査・研究、実社会での活動などを行う。
 - ・調査・研究・活動の成果を公表する。

(3) 演示プログラム例

こうしたねらい、レベル別区分のもと、演示プログラムを開発・提供していくが、下図は、里山と人の暮らしを結びつけるものとして炭を取り上げ、里山の文化を通して、生物多様性の保全状況を学ぶ演示プログラムの一例を示した。県民はひとはくが提供する①～④の段階的なプログラム群の中から自由に好みのものを選択・体験しながら、次のステップへと学びを発展させ、スキルアップも図られる。そして、他の来館者もプログラムに引き込んでいくものである。

<プログラム例 テーマ：里山(炭焼き体験)>

■ねらい

里山に対する興味・関心が高まり、里山の保全・再生や生物多様性保全に関する理解が深まる。

■プログラム構成

①	<p><はじめてレベル> 炭と里山のサイクルの不思議を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・里山の多様な生物を知り、里山と日常生活との関係に関心を持つ。 ・里山から生み出される様々な種類の炭と原木を観察する。
②	<p><少し上達レベル> 里山探索</p> <ul style="list-style-type: none"> ・炭の原木を採集するための里山管理方法を、現地で実践している人から学ぶ。 ・里山にある希少な動植物について研究員等から学ぶ。
③	<p><かなり上達レベル> 炭焼き体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・里山の木を伐採し、伐採した木を使って、炭窯で炭を焼く。 ・里山保全の活動に参加する。
④	<p><プロ並みのレベル(運営にも参加)> 里山・炭焼き屋台</p> <ul style="list-style-type: none"> ・里山に残された多様な生き物を紹介する。 ・菊炭を使ったお茶会 ・白炭を使った風鈴や木琴等製作



炭焼き体験から里山と人の暮らしの関係を学ぶ。



炭焼き屋台で炭を活用したプログラムを担い手が運営したり、里山の自然・環境を紹介したりする。

その他、今後ひとくが提供する演示プログラムとしては下表のものがある。この中には、オオサンショウウオなどの絶滅危惧生物の生活を知るプログラムやシカ肉を通して動物と森林の関係をj知るプログラムなどの生物多様性に関連したもの、および名所図絵などを通じた歴史文化の関連するもの、運営に関わるものを含んでいる。

演 示 の 段 階					
スキルレベル	はじめて	少し上達	かなり上達	プロ並みのレベル、運営にも参加	
ステップアップの内容	・自然の不思議に驚きを感じ、自然を楽しむ ・ひとくはく親しむ	・自然・環境に関する知識を深める ・複数の分野への興味・関心を喚起する	・調査、研究、フィールドワークなど、自分で行動し体験して知識や考え方を身につける ・ひとくはくの標本や資料、情報を活用し、専門知識やプロの技術などを習得する	・ひとく及び大学、研究機関、専門家などのネットワークを活用し、大学院レベルの本格的な調査・研究、実社会での活動などを行う ・調査・研究・活動の成果を公表する	
自然 プログラムの カテゴリ	大地	光で変化する鉱物を見よう(a.①) チャートの火打石を使おう(a.①) 岩石薄片をつくろう(c.④-⑦)	岩石と鉱物の観察(ad.④-⑦)	岩石採集と地質調査(d.⑥⑦)	岩石屋台(e.⑥⑦)
	古生物	恐竜化石の観察(a.①) 恐竜の歩き方(a.②-④) アンモナイト模型をつくろう(c.④-⑦)	恐竜骨格の組み立て(ac.⑤-⑦) 色々な恐竜(d.④-⑦) アンモナイト化石の観察(d.④-⑦)	化石の発掘とクリーニング(acd.⑤-⑦) アンモナイトの発掘調査(d.⑥⑦)	恐竜工房(c.⑥⑦) アンモナイト屋台(e.⑥⑦)
	植物	タネの模型をつくろう(c.①) 花でしおりをつくろう(c.①) 葉脈標本をつくろう(c.④-⑦) ツルでリースをつくろう(c.①)	タネの観察(d.④-⑦) 花の観察(d.④-⑦) 葉の観察(d.④-⑦) ツルの観察	種子散布者調査(d.⑤-⑦) 「花と虫の関係」調査(d.⑤-⑦) 植生調査(d.⑤-⑦) 里山のツルと里山管理(ad.⑤-⑦)	植物屋台(e.⑥⑦) 植生屋台(e.⑥⑦) 里山屋台(e.⑥⑦)
	動物	スミスネズミの観察(a.①) なりきりダンゴムシ(b.②③) ハチミツをしぼろう(a.①) 擬態昆虫がし(a.①) オオサンショウウオの観察(a.①) なりきりオオサンショウウオ(b.②③) なりきりホタル(b.②③)	色々なネズミ(d.④-⑦) ダンゴムシの観察(d.①) ミツバチの観察(d.③-⑦) 擬態昆虫の観察(ad.③-⑦) 色々なサンショウウオ(d.⑤-⑦) ゲンジボタルの生息環境(a.③-⑦)	ネズミ類調査(d.⑥⑦) ダンゴムシ調査(d.④-⑦) ハナバチ調査(d.⑥⑦) 昆虫採集と標本作成(acd.④-⑦) オオサンショウウオ調査とプチ自然再生(d.⑥⑦) ホタル調査と室内実験(d.⑤-⑦)	ネズミ屋台(e.⑥⑦) ダンゴムシ屋台(e.⑤-⑦) ハナバチ屋台(e.⑤-⑦) 昆虫屋台(e.⑤-⑦) オオサンショウウオ屋台(e.⑦) ホタル屋台(e.⑥⑦)
	生態系	水生生物の封入標本づくり(c.③-⑦) カフハタモロコの観察(a.①) カエルの観察(a.①)	川の生物の観察(d.③-⑦) ため池の色々な生物(d.③-⑦) 水田の色々な生物(d.③-⑦)	河川環境調査(d.⑤-⑦) ため池環境調査(d.⑤-⑦) 水田環境調査(d.⑤-⑦)	河川屋台(e.⑥⑦) ため池屋台(e.⑥⑦) 水田屋台(e.⑥⑦)
	生活	色々な環境の温度を測ろう(d.①) 地球温暖化をシミュレート(a.③-⑦) 身近な植物の観察(a.③-⑦)	ヒートアイランド現象とは(a.⑤-⑦) 太陽の力を測ろう(d.③-⑦) 都市化で増える植物(a.④-⑦)	ヒートアイランド現象調査(d.⑥⑦) チョウの分布調査(d.④-⑦) 「生物と都市化の関係」調査(d.⑤-⑦)	温度測定屋台(e.⑥⑦) 地球温暖化屋台(e.⑥⑦) 都市化屋台(e.⑥⑦)
	産業	ハチの巣の観察(a.①) 偏光シートで遊ぼう(a.①) 砂鉄を集めよう(a.③-⑦) 海水から塩をつくろう(c.③-⑦)	自然の中の六角形(a.④-⑦) 兵庫の鉱山(a.⑤-⑦) 砂鉄とタタラ製鉄(a.⑤-⑦) 塩田とアカマツ林(a.⑤-⑦)	「六角形と産業の関係」調査(d.⑤-⑦) 鉱山の現状調査(d.⑤) 製鉄方法の変遷(d.⑥⑦) 製塩方法の変遷(d.⑥⑦)	六角形屋台(e.⑥⑦) 鉱山屋台(e.⑦) 製鉄屋台(e.⑥⑦) 製塩屋台(e.⑥⑦)
	地域づくり	まちの模型をつくろう(c.④-⑦) 棚田植物の観察(a.④-⑦) 水生生物の観察(a.①)	まちの景観(a.⑤-⑦) 棚田の景観(a.⑤-⑦) ピオトープ調査(d.⑥⑦)	まちの景観調査(d.⑥⑦) 農村景観調査(d.⑥⑦) ピオトープづくり(d.⑥⑦)	まち屋台(e.⑦) 農村屋台(e.⑦) ピオトープ屋台(e.⑥⑦)
	食べ物	山菜を食べよう(c.①) 餅餅をつくろう(c.⑤-⑦) シカ肉を食べよう(c.⑤-⑦)	色々な山菜(a.⑤-⑦) 果実の観察(a.④-⑦) シカの食害(a.⑤-⑦)	「人と山菜の関係」調査(d.⑥⑦) 「人と果実の関係」調査(d.⑥⑦) シカ肉調理法研究(d.⑥⑦)	山菜屋台(ce.⑥⑦) 果実屋台(ce.⑥⑦) シカ肉屋台(e.⑥⑦)
	民俗	炭と里山の不思議を知る(a.①) 蚕と繭の観察(a.①) 粕餅とちまきを食べよう(a.①)	里山探検(ad.④-⑦) 色々な絹織物(a.⑤-⑦) 色々な葉の利用方法(ad.④-⑦)	炭焼き体験(cd.④-⑦) 絹織物と染色(cd.⑥⑦) 葉の利用方法の開発(d.⑥⑦)	お茶会・炭焼き屋台(ce.⑥⑦) 絹織物屋台(e.⑥⑦) 葉っぱ屋台(e.⑥⑦)
	歴史	名所図会を見よう(a.①) 里山の植物観察(a.④-⑦) ヌートリアの観察(a.①)	名所図会からみた六甲山の変遷(d.⑥⑦) 里山の成り立ち(a.⑤-⑦) ヌートリアの歴史(ad.⑤-⑦)	「六甲山の人と自然」調査(d.⑤-⑦) 森林利用の歴史(d.⑥⑦) 外来生物の歴史(d.⑥⑦)	六甲山屋台(e.⑤-⑦) 森林屋台(e.⑥⑦) 外来生物屋台(e.⑥⑦)
	アート	草絵をつくろう(c.①)	植物画を描こう(c.④-⑦)	植物でクラフトをつくろう(c.⑤-⑦)	展覧会(e.⑤-⑦)
	音楽	草笛をつくろう(c.①)	備長炭で木琴をつくろう(c.④-⑦)	色々な自然物で楽器をつくろう(c.④-⑦)	コンサート(e.⑤-⑦)
	文学	芭蕉「笈の小文」と兵庫(a.⑥⑦) ラフカディオハーンの見た兵庫の風景(a.⑥⑦)	芭蕉と自然・環境(d.⑥⑦) ハーンと自然・環境(d.⑥⑦)	芭蕉のたどった西国街道を歩く(b.⑥⑦) ハーンの聞いた鳴く虫を聞き、見た風景を見る(b.⑥⑦)	文学屋台(e.⑦)
	学習支援	各種演示プログラムへの参加	演示プログラムの運営補助	演示プログラムの企画・運営	学習支援の担い手の指導
	事業運営	各種事業への参加	事業の運営補助	事業の企画・運営	事業運営の担い手の指導
	収蔵庫管理	収蔵庫探検ツアー	標本作成・収蔵庫管理の補助	標本作成・収蔵庫管理の実践	収蔵庫管理の担い手の指導

○演示の種類・・・a: 見て体験する演示、b: なりきる演示、c: 作る演示、d: 調べる演示、e: 伝える演示

○主な対象・・・①: みんな、②: 幼児、③: 小学低学年、④: 小学高学年、⑤: 中学生、⑥: 高校生、⑦: 大人

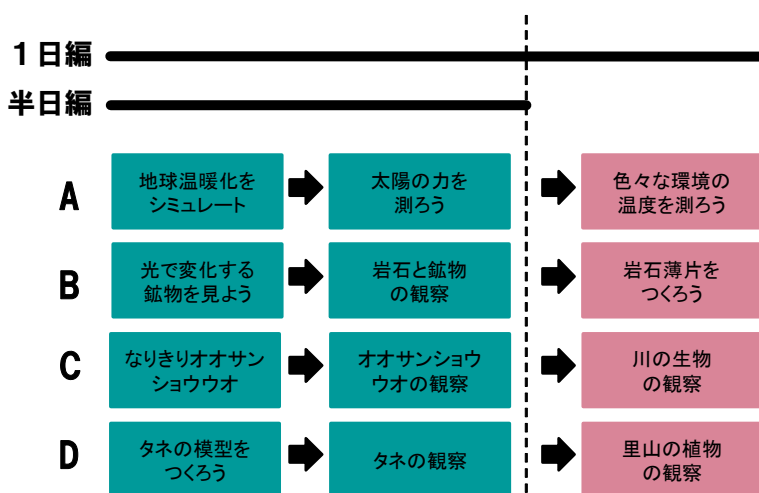
(団体向け演示プログラムの実践例—小学校団体に対する環境学習支援プログラム)

ひとはくには毎年数多くの団体が来館し、展示の観覧を基本とした学習活動を行っているが、団体を対象とする演示プログラムには個人の場合とは異なる配慮が必要となる。

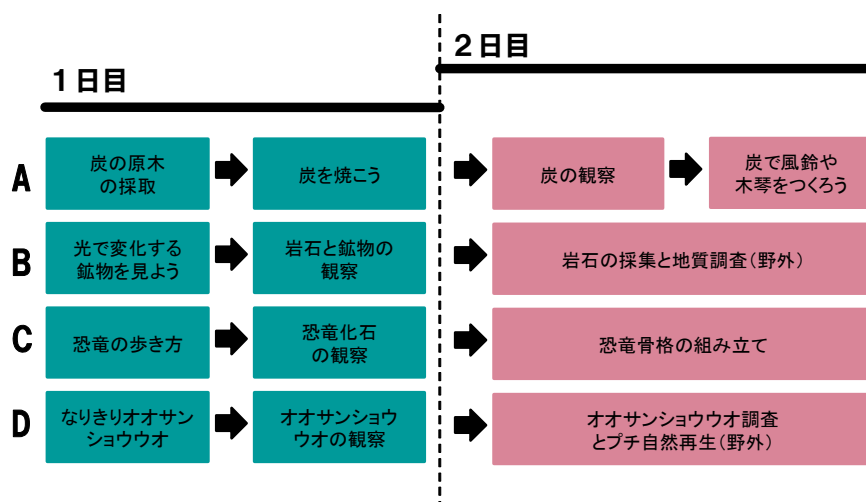
下図は、団体向け演示プログラムの例として、小学校団体に対する環境学習支援プログラムを事例に、演示プログラムの実践例を示したものである。

小学校団体は、滞在時間が半日程度と短いため、短時間の間に効率的に学習できるプログラムを準備する必要がある。小学校教員との連携によって学校側のニーズを把握し、ニーズに合致したプログラムを提供する必要がある、下図を例にいわば「オーダーメイドのプログラム」を行うこととする。

小学校団体向けの演示プログラムの例(半日編・1日編)



小学校団体向けの演示プログラムの例(2日編)



(当面の事業に関連して取り組む「演示手法を活用したソフト事業」)

(1) ファーブル展をきっかけにしたプログラムの展開

① ひとほくスタッフ等による昆虫のからだの不思議を感じるプログラムの提供

- ・ 昆虫の立体パズル体験
- ・ 羽の動きを模した巨大模型の操作
- ・ 虫の動きに自分を同化する映像プログラムの実演

② 昆虫を研究テーマとする活動グループによる屋台（演示ボックス）の出店

- ・ 活動グループの成果をプレゼンテーション

③ ひとほくスタッフによる担い手育成プログラムの開始

- ・ 稀少昆虫の分布状況調査等を通じて県下各地域の担い手となる人材を育成

(2) 環境大臣会合と連動した生物多様性や気候変動をテーマとしたフィールドワークの実施

- ・ 研究員と地域住民との協働による河川水温の同時刻一斉調査
- ・ 研究員と地域住民との協働による身近な水田、ため池、里山の生物多様性を知るプログラムの実施

(3) 恐竜化石発掘をきっかけにしたプログラムの展開

① 研究員やクリーニングボランティアによる模擬発掘体験プログラムの提供

- ・ 化石発掘残土を使った植物や貝等の化石発掘体験を定期的に開催

② 恐竜を研究テーマとする活動グループによる屋台（演示ボックス）の出店

- ・ クリーニング施設等を活用して、活動の成果をプレゼンテーション

③ クリーニング作業ボランティア、発掘解説ボランティアの中から担い手を育成

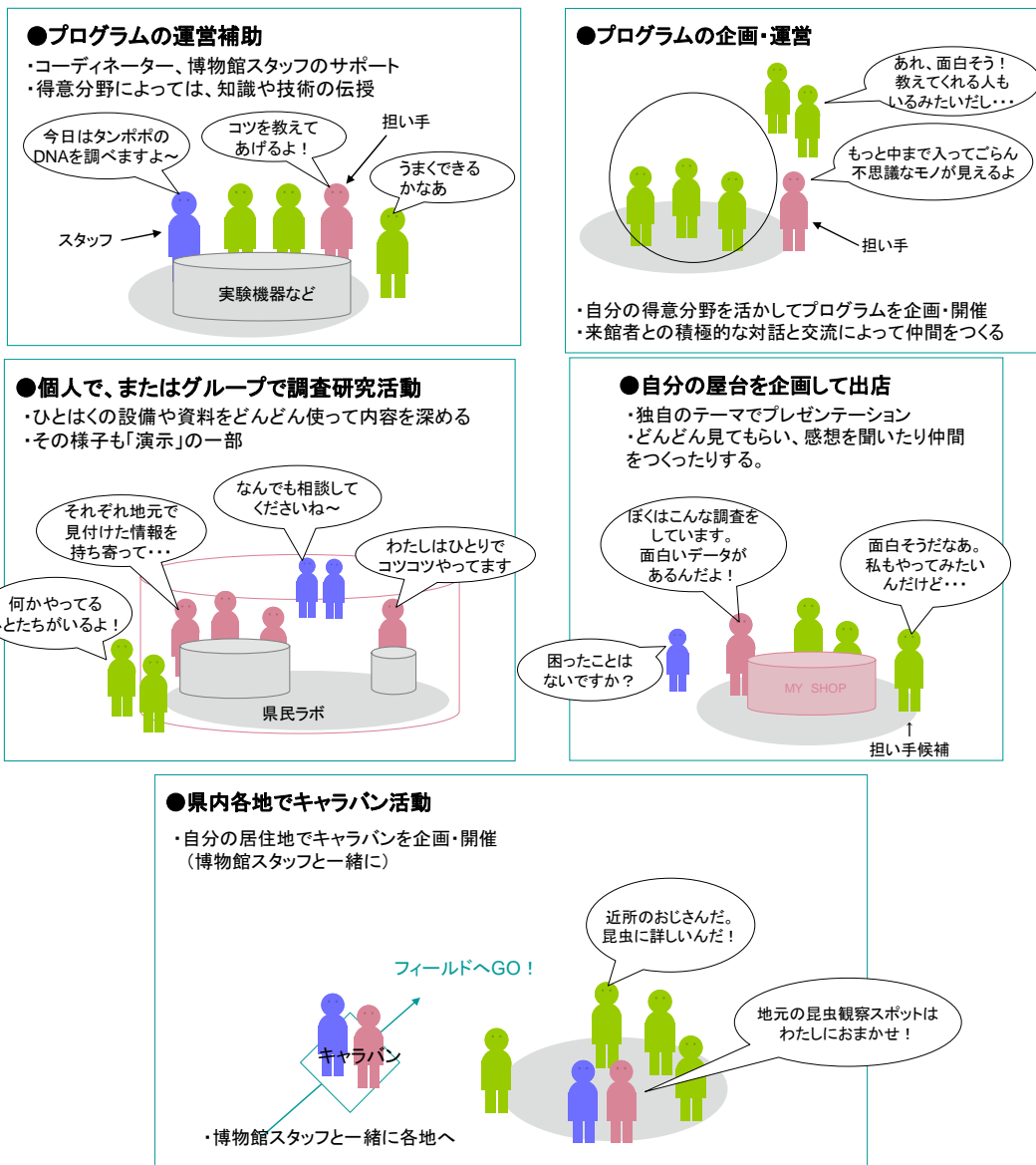
2 演示プログラムと担い手のかわり

(1) 演示プログラムにおける担い手の活動内容

ひとはくにおける事業活動は、担い手の参画によってより一層充実したものとなる。想定される担い手の活動内容は、以下の5つに区分される。

- ① 演示プログラムの運営補助
- ② 演示プログラムの企画・運営
- ③ 個人またはグループで行う調査研究活動
- ④ 屋台(=スタッフ、担い手がプレゼンテーション等を実施)の出店
- ⑤ 館外でのキャラバン活動

ひとはくでは、担い手の育成を図りながら担い手の様々な活動を積極的に支援する。



(2) 担い手に求められるスキル

担い手が演示プログラムを実施する際には、担い手は、各プログラム分野の専門性だけでなく、演示レベルに応じたスキルが必要となる。そのため、担い手は、演示レベルに応じて、下表のようなスキルを習得しておく必要がある。

演示の段階				
	はじめて	少し上達	かなり上達	プロ並みのレベル、運営にも参加
担い手として求められるスキル	<ul style="list-style-type: none"> 自由な遊びを見守る 幼児の行動パターンにあわせた安全確保、危険回避の方法 遊びを通して子どもから発する疑問への回答テクニック、次のステップへの誘い 	<ul style="list-style-type: none"> 来館者との積極的な対話・交流 来館者から「なぜ？」を引き出す対話のテクニック 楽しませながら伝える観客との対話のテクニック 	<ul style="list-style-type: none"> 参加者にあつた調査・研究の方法をアドバイス 	<ul style="list-style-type: none"> 屋台づくりのテクニック ひとはく外でも活動できる技術 地域内、地域間のネットワークの構築

(3) 演示プログラムの充実

演示による学びのサイクルを創り出し、維持していくためには、自由に選択できる多種多様なプログラムの提供が不可欠である。そのためには、新ひとはくのビジターに対して、質量ともに十分なプログラムを用意することができるかどうかが必要である。そのプログラム充実の方法について示す。

① 演示プログラム充実の必要性

現在、ひとはくは年間約650件（のべ実施回数）の学習プログラムを提供しており、最終的に必要となるプログラムの数は、今後の運用から判断することとなるが、少なくとも現在より20%程度上積みする必要がある。この上積み部分は、基本的には担い手が主体的に運営するプログラムを増やすことにより充当する。

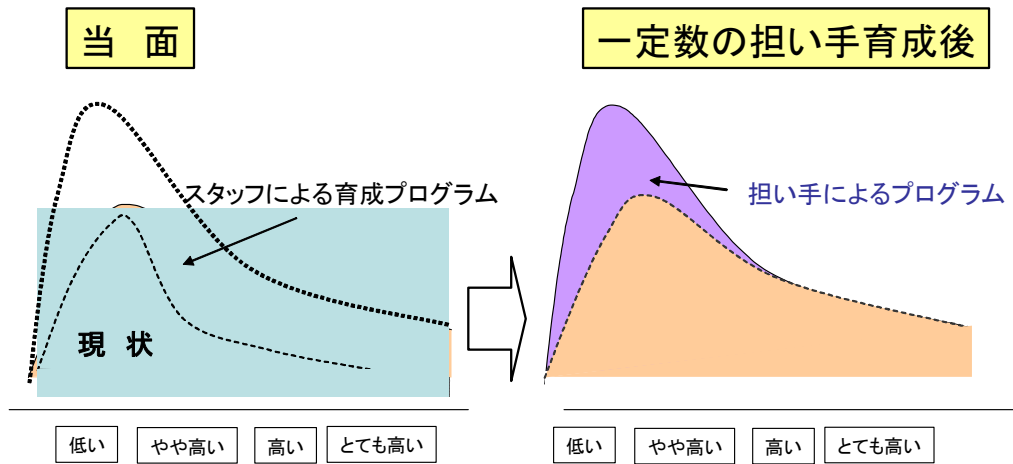
② 演示プログラム充実のための手順

現在提供しているプログラムをスキルのレベル別に見ると、「低い」「やや高い」「高い」「とても高い」の4段階の区分で、「低い」が60%程度、「やや高い」が30%程度、残りの約10%が「高い」と「とても高い」となっている。

計画策定後数年間は、主としてひとはくスタッフによる「高い」「やや高い」プログラムを充実して担い手を育成する。一定数の担い手が育成された後は、育成された担い手が運営主体となる「低い」「やや高い」プログラムを充実していくというように、段階的な手順を踏んでプログラムの充実を図ることとする。

（担い手の育成については第5章で説明する）

演示プログラム充実の手順



IV 施設計画

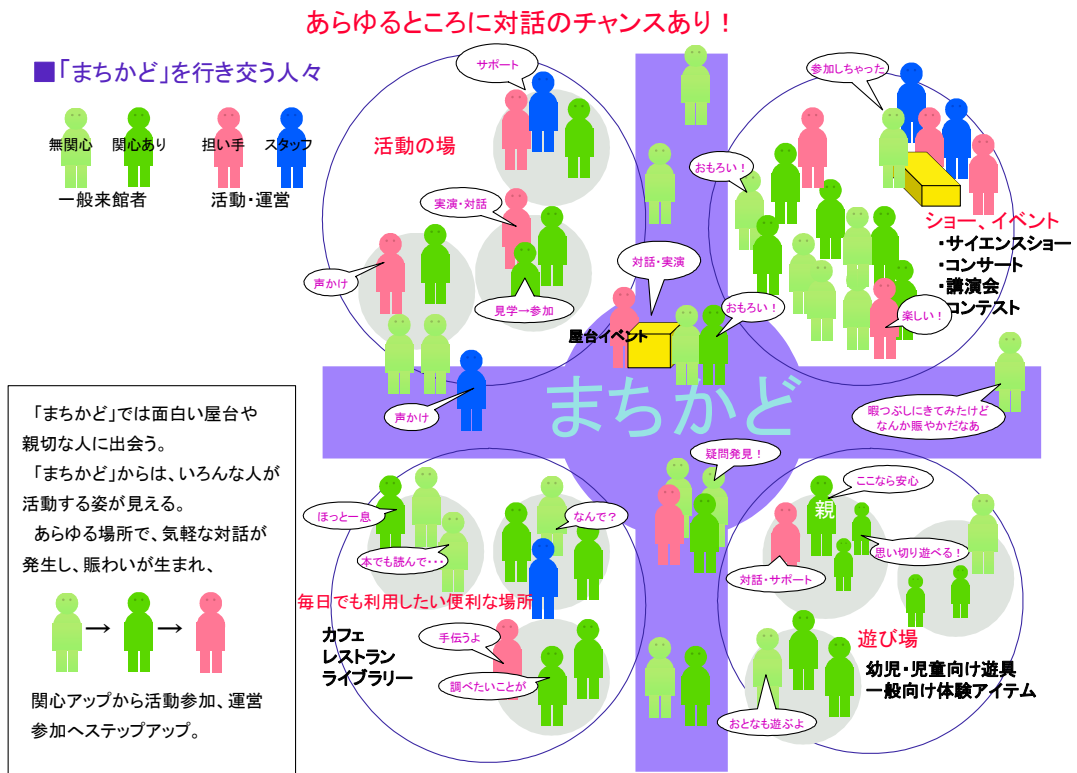
第2章、第3章では、交流の促進などの機能を実現するソフトとして、「人が介在」する双方向性の「演示」の展開を示してきた。その実施に当たっては、現在の本館では、常設展示の劣化、陳腐化、展示スペースの狭隘化、県民の交流・学習機会拡大のためのスペース不足が課題となっており、新たな事業活動の「場」としての新館の建設が求められる。本章では、新たなひととはくに必要な新館の機能と施設について述べる。

1 新館に求められる機能と場

新館では、参画型学習支援機能と次世代育成支援機能が新たに付加され、従来からの県民活動・交流拠点機能、環境学習機能、全県展開機能、シンクタンク機能を強化・充実し、県民主体の拠点づくりを強力に進めることが求められる。

新館では、あらゆるところに活動の場、交流の場、遊び場があり、「まちかど」のごとく同時多発的なコミュニケーションがあちこちで発生することが重要である。その場では、担い手とスタッフ、一般来館者などが混在しており、この緩やかなコミュニケーションを通して、来館者の興味・関心が高まり、学習活動が促される。

具体的には、驚きを呼ぶ展示、楽しさや感動を提供できる参加体験型プログラムが館内の各所で展開され、自然・環境に関心の低かった層の好奇心を掴み、ひととはくに引き込む。また、博物館活動を支える人材である担い手が活動成果を発表したり、調査研究を深めたりしている。



2 新館と本館の役割

新館では①兵庫の多様な自然・環境、人と生物の共生の取組等をテーマ性を持って紹介し、県民（特に無関心層）の好奇心を掴み、驚きを呼びおこすことができる空間、②なりきりシミュレーション体験などを行うなど、担い手等によって多様な参加体験型プログラムが展開され、来館者はその活動に自由に参加でき、来館者や演示に参加する人同士がお互いに交流できる空間、③県民自らが調査解析や研究・実習等を行うことを通じて、自然・環境活動を支える人材や次世代の育成を図る空間を整備する。

一方、本館は、劣化、陳腐化している展示のリニューアル、自然、環境活動のための講座等の充実、受託研究、委託調査等の受け入れを拡大しながら、①地球環境の歴史や生物の生態を系統立てた展示、②自然・環境について座学を中心とする学習の提供、③自然保護、環境施策等の総合的なシンクタンク機能等の従来の機能を強化し、継続して維持していく。

そして、新館での体験活動や事業参加で高められた興味・関心を本館で体系的に学習する一方、本館での「展示を中心とした学び」から、新館では「自ら調査研究や体験活動・事業参加」を行うものとする

本館と新館の役割

新館

- 兵庫の多様な自然・環境、人と生物の共生の取組等をテーマ性を持って紹介し、県民（特に無関心層）の好奇心を掴み、驚きを呼びおこすことができる空間
- 担い手によって、多様な参加体験型プログラムが展開され、来館者がその活動に自由に参加でき、お互い交流できる空間
- 県民自らが調査解析や研究・実習等を行うことを通じて、自然・環境活動を支える人材や次世代の育成を図る空間

本館

<従来の機能を強化し、継続して維持する>

- 地球環境の歴史や生物の生態を系統立てて展示
- 自然、環境について座学を中心とする学習の提供
- 自然保護、環境施策等の総合的シンクタンク機能

- 【強化策】**
- ・劣化、陳腐化している展示のリニューアル
 - ・自然、環境活動のリーダー養成のための講座等の充実
 - ・受託研究、委託調査等の受入拡大

3 新館に必要な施設（構成する主要ゾーン）

（1）驚きと感動を与える大空間展示ゾーン

- はじめて「ひとはく」に出会う場として、来館者の好奇心を引き出す空間
- 来館者に驚きと感動を与え、自然環境に興味・関心を高める空間
- 「なりきる」、「体験する」等の参加体験ができ、研究員や来館者同士の交流ができる空間

森川里海のつながり、コウノトリの野生復帰、恐竜化石等を題材に、大空間の各所に生物多様性や人と自然の共生を紹介する映像・展示を配置するとともに、ミニワークショップなどの参加・体験型展示を複合的に配置

- ・兵庫・地球の環境の現状・未来を五感に訴える「体感型映像」
- ・巨大なジオラマ等で兵庫の多様な自然・生き物を紹介する
「生物多様性の神秘」、「兵庫の太古の自然」
(壮大な森林ジオラマ、コウノトリの生息する環境ジオラマ、恐竜化石レプリカ等)
- ・重要収蔵品を収蔵庫風に展示する「魅せる収蔵庫」
- ・鳥のように上空から兵庫の豊かな自然・環境を眺める等「疑似体験する空間」
- ・活動グループ等が日頃の研究活動を紹介・実演する「ミニワークショップ」
- ・ジーンファームで育成してきた絶滅危惧植物等を一般公開する「生態展示温室」
- ・兵庫の貴重な生態系を知る「ビオトープ」(屋上や屋外緑地活用)

（2）県民ラボ・担い手グループゾーン

- 自然・環境活動を支える人材・次世代の育成を図るための教育普及の空間
- ・環境学習などをテーマに専門的な器具・装置を活用できる。
 - ・学習者のレベル、課題に合わせて調査・研究活動が継続的に行える。

大空間展示ゾーンと自由に行き来できるよう、その周囲に配置

- ・小中学生、来館者が博物館活動支援グループ等のサポートを受け、楽しみながら本格的な実験に参加する「スーパー理科室」
- ・専門的な器具・装置を備え、人博の活動を支える人材や大学生・高校生等が自ら実験・研究できる「県民オープン研究室」

（3）ショップ等

気軽にひとはくに立ち寄ることができる雰囲気重視した「ひとはくの日常化」を図る空間

- ・館内の学習に利用する体験学習用キット等を販売する「森川里海ショップ」
- ・県内産食材を活用し、環境学習と絡めた食育の場とする「カフェ」

①驚きと感動を与える大空間展示ゾーン (2,800㎡)

ゾーン名	室・コーナー名	事業内容	展示(演示)例	
驚きと感動 を与える 大空間	映像ワークショップスペース (環境体験シミュレーター)	一般の来館者及び学校生徒に対し、兵庫の環境、地球の環境の現状と未来を五感に訴える映像プログラムを用いて紹介。	・温暖化で変わる100年後の兵庫 ・兵庫の自然の移り変わり ・人麻呂の詠んだ風景は ・丹波の恐竜と生きた世界 など	
	生物多様性の神秘	多数の生き物等の標本、レプリカ等や巨木を展示することにより、自然の神秘性を表現し、驚きと感動を与える。	・兵庫県内の豊富な生物多様性を森川里海の一連のつながりで紹介 〔森林(里山)ジオラマ、川海ジオラマ、コウノトリと人との共生等〕	
	兵庫の太古の自然	絶滅した恐竜等の古生物を紹介し、埋蔵自然遺産の発掘・調査から標本・レプリカ制作、展示までの一連の作業を体験。	恐竜化石レプリカ等展示 ・恐竜の足跡と歩行速度体験 ・恐竜の骨格レプリカ組み立て体験 ・化石発掘体験、地質調査体験 など	
	収蔵古風展示 コーナー	魅せる収蔵庫	重要なコレクションを天井・壁・床全面に公開する。想像を超える自然の多様さと、それを収集・理解した先人の創造性にふれ、来館者の知的好奇心を高める。	・江田コレクション(昆虫) ・小林コレクション(鳥類) ・堀コレクション(神戸層群植物化石) ・クジラ骨格(長さ10m×2体)
		使う収蔵庫	大型模型や標本類等を陳列し、地域への理解を高める。また、すべての陳列物は地域研究員・学校等の要望に応じ貸出しを行い、県内各地で展開するためのツールとして活用する。	・大型昆虫模型(キベリハムシ、オオスズメバチ など) ・恐竜化石・レプリカ(丹波の恐竜、アンモナイト) ・植物レプリカ(マヤラン、サギソウ) など
	参加体験型 コーナー	兵庫の生き物 になりきる	兵庫の貴重な生き物になりきってその生活を疑似体験したり、本物の生き物を採集、観察したりする。	・オオサンショウウオ ・スミスネズミ ・ホタル類 ・ツキノワグマ など
		鳥になってみる 兵庫の自然	好きな地域の上空から鳥のように床面、直立大型液晶の写真を眺めるとともに、携帯端末等を用いて、それぞれの地域に特徴的な自然、景観を見つけ出し、郷土の自然を知る。	・兵庫空中散歩 ・兵庫自然百首 ・上空から知る川 ・丹波の恐竜発掘現場 ・今月のコウノトリの居場所
	実演屋台(演示)	研究員や担い手等が、日ごろの実践活動や研究成果を屋台形式で紹介・実演したり、ミニワークショップを行ったりする。	・昆虫、植物、岩石等の標本づくり ・タネの模型を飛ばす ・まちなみ模型づくり ・ハチミツしぼり ・化石のレプリカづくり など	
生態展示温室、ビオトープ	兵庫の貴重植物等の生態展示を行い、ジーンファームの貴重植物を一般公開、ワークショップ実施。	サギソウ、トキソウ、オニバス、フジバカマ キキョウ、オキナグサ、ミスミソウ タジマタムラソウ、サツキ、ヨコグラノキなど		

②県民ラボ、担い手グループゾーン (900㎡)

ゾーン名	室・コーナー名	事業内容	演示例
県民ラボ	スーパー理科室	小・中学生や一般来館者を対象として、器具・実験台で作業を行う。スタッフの実演や説明用画面などを見ながら、参加することで自然・環境の基本的な作業を実感する。	・水質を調べる ・土のなかのむし調べ ・石のなかの化石を探す ・植物の色をとりにだす ・封入標本づくりなど
担い手 グループ ゾーン	県民オープン研究室	高校・大学生や連携グループなどが専門性の高い器具や装置を利用して研究・実習を行なう。県民自らの手により自然環境の調査解析をすることで科学的に兵庫県の過去現在を知り、将来を考える。	・遺伝子の部屋(DNA解析) ・化石の部屋(微化石などの解析) ・飼育の部屋 (希少昆虫動物の飼育等) ・電顕の部屋 (電子顕微鏡を使った観察) ・温度の部屋 (川や都市の温度環境の解析等)
	担い手グループ 会議室	複数の連携グループがデータ解析等のための会合・作業を行なう。成果はひとくはく新館や県内各地での演示や報告となり、新たななかまたちの参加・連携を深める。	

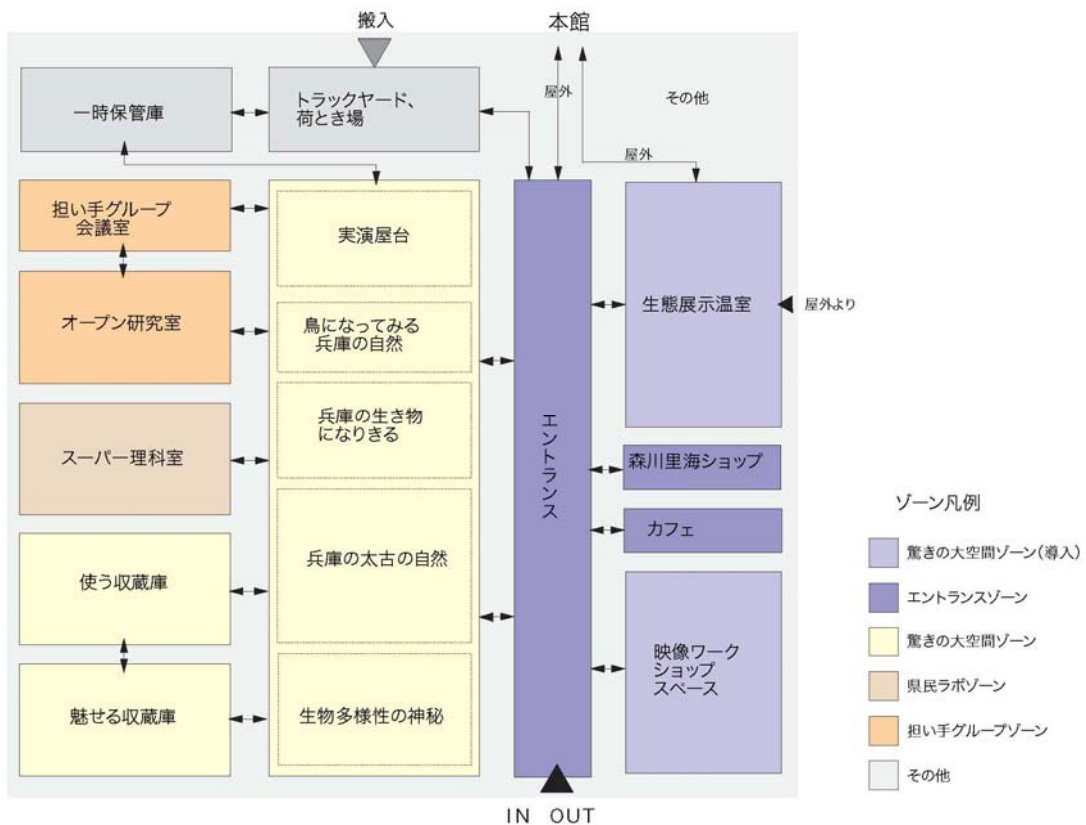
③ショップ等(200㎡)、その他 (2, 200㎡)

ゾーン名	室・コーナー名	事業内容	具体例
ショップ等	森川里海ショップ	県下の名産品を通じた環境学習の場の提供と、館内オリジナル演示キット等の販売。	・森里ショップ ・川海ショップ ・水辺ゾーン
	カフェ	環境に配慮した県内・海外食材を利用した食事を通して環境学習を实践。	・「兵庫からの食材」「世界からの食材」の2コーナー ・田圃景観
その他	一時収蔵部門	一次保管庫 トラックヤード 荷とき場	
	管理共用部門	スタッフ室 機械室 共用部分	

新館延床面積 合計 6, 100㎡

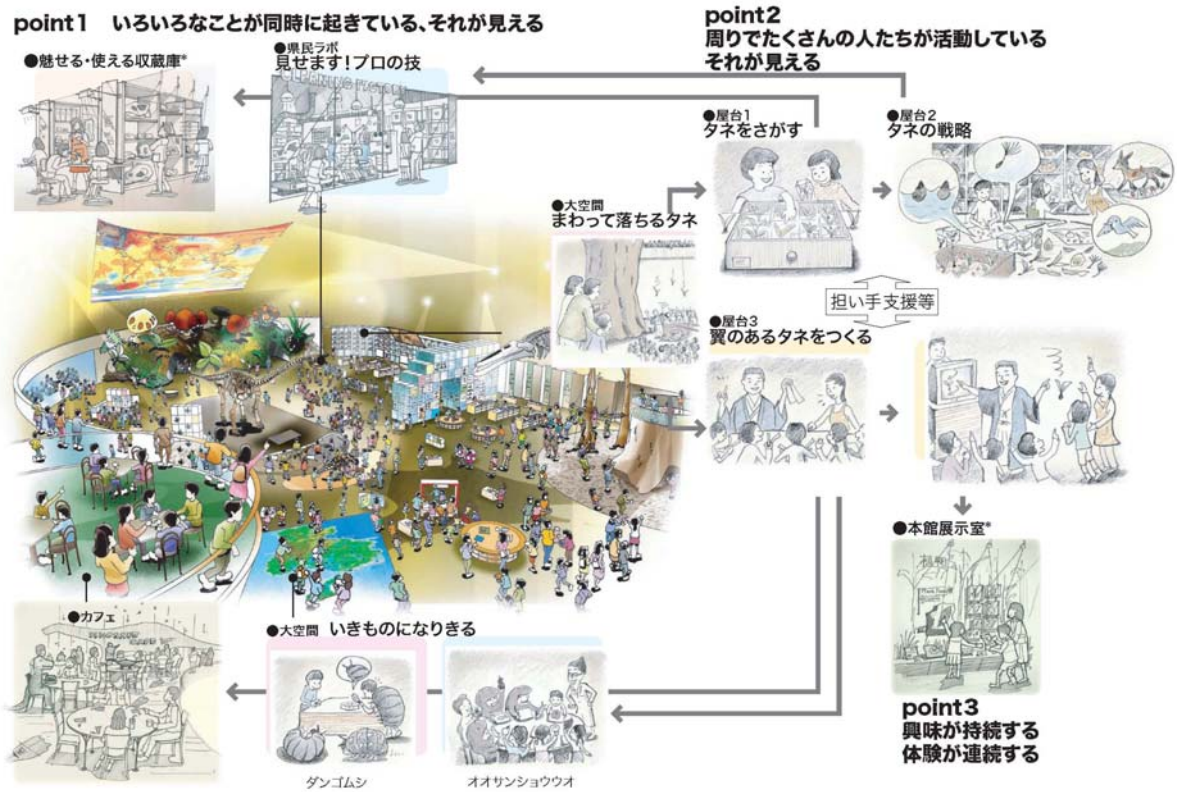
※屋外緑地でのビオトープを整備するとともに、屋上緑化やバイオマスエネルギーの活用など地球温暖化に配慮した建物を検討する。

4 施設の配置計画 本館との連絡を配慮しながら、配置計画を以下の通り計画する。



5 新館の空間イメージ

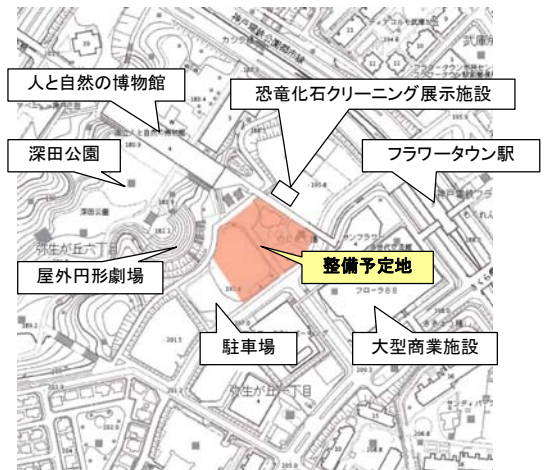
ここでは新館の中核をなす「驚きの大空間」イメージを提示する。生物多様性をメインテーマに、大空間の中に、壮大な森林ジオラマや恐竜化石、コウノトリの野生復帰の取組等の展示やミニワークショップ等参加・体験型展示を複合的に配置する。



6 新館整備予定地の概要

所在地	三田市弥生が丘6丁目
用途地域	近隣商業地域
建ぺい率	80%
容積率	300%
敷地面積	約7,400㎡
交通条件	神戸電鉄フラワータウン駅より徒歩2分
周辺状況	<ul style="list-style-type: none"> ・市道を挟み、北側に人と自然の博物館(本館)がある。 ・南側には大型商業施設、駐車場が立地。利用者多数あり。 ・北西側には屋外円形劇場、緑地公園が広がっている。 ・敷地北東側に高架通路(徒歩、軽車両専用)と接している。

位置図



7 施設の位置及び周囲との連携

- (1) 周囲に開かれた活動しやすい配置とする。
- (2) 人と自然の博物館（本館）と動線・機能を連携する。
- (3) フラワータウン駅方面を主なアクセス動線とし、幹線道路から気軽に入ることができる施設とする。
- (4) 敷地全体を効率的に利用する。



V 運営方針

この章では、演示を中心とした活動方針（第2章、第3章）及び施設計画（第4章）を具体化し、新しいひとはくを運営するために必要な方針として、博物館スタッフとともに演示活動の主体となる担い手の育成、およびその事業活動などを効果的・効率的に支える運営体制の方針を整理する。

1 担い手の育成

(1) 担い手育成の必要性

ひとはくでは、これまでセミナー事業、研究員が県下各地に出張し、展示活動やセミナー、リサーチプロジェクトなどのプログラムを通じて、各地の県民やNPO、行政などが取り組む、地域の自然・環境・文化についての学習や活動をサポートする「キャラバン事業・地域研究員養成事業」、さらに県民のみなさんが地域で調べた自然・環境・文化についての発見を報告しあう発表会「共生のひろば」事業を実施しており、これらの活動の中で、いわゆる担い手となり得るグループが育ち、現在は約10のグループ（実働50名程度）が実際にひとはくの活動に参画している。

ひとはくにおいて、これらのグループが提供しているプログラム数は、現在約30件程度であるが、新しいひとはくにおいて、県民に豊かな学習機会を提供するためには、これらのプログラムの数を増やすとともに、並行して実施主体となる担い手を育成していくことが必要である。

(2) 担い手育成の進め方

ひとはくでは、新展開5年以後に、セミナー事業、キャラバン事業などのプログラムを通じて、各地の県民やと団体と連携を深めてきた。その参加者個々のスキルや関心の程度はさまざまであったが、プログラムへの参加を繰り返すことで、参加者の on-the-job training（実際にプログラムに参加すること）となり、スキルアップや関心の方向の変化が起きることがひとはくスタッフにも実感されてきている。

その経験をふまえて、担い手の育成方法は、参加者の意欲やスキルの程度によって、段階的に進めることが好ましいと考える。ここでは、このことを踏まえ、基本的な3つの育成モデルを提示する。

①意欲とスキルがともに高い人の場合

- ひとはく連携活動グループに登録する
- 館内または館外での実践の場を提供する

②意欲はあるがスキルに自信がない人の場合

- 様々なプログラムに参加してもらう
- スタッフや担い手が運営するプログラムの補助を体験してもらう
- プログラムの企画・運営を体験してもらう
- ひとはく連携活動グループに登録する
- 館内または館外での実践の場を提供する
- スキルを高めるためのスキルアッププログラムに参加してもらう

③担い手の活動に関心はあるが意欲が低くスキルにも自信がない人の場合

- 担い手との交流会や担い手の活動発表会に参加してもらう
- 様々なプログラムに参加してもらう
- スタッフや担い手が運営するプログラムの補助を体験してもらう
- プログラムの企画・運営を体験してもらう
- ひとはく連携活動グループに登録する
- 館内または館外での実践の場を提供する
- スキルを高めるためのスキルアッププログラムに参加してもらう

①の場合においては、ひとはくスタッフの役割は「場」のコーディネーターである。また、今後、担い手育成の中心となる②③の場合は、スキルアップを狙いとする育成プログラムをひとはくスタッフが提供していく。

新館建設の前後で、担い手の育成は2つの期間を想定する。基本計画策定後〔新館建設まで〕は、これまでと同様、主としてひとはくスタッフによるプログラムにより担い手を育成する。その後〔新館建設後〕、引き続いて新たな担い手を育成しながら、育った担い手がグループを形成して運営主体となって、自然・環境・文化について学習、活動する県民の裾野を広げていく。このような段階的な手順を踏んで担い手を育成していく。

当面、担い手が運営するプログラムを現在約30件程度から約100件程度増加することとし、並行して新館建設時までに少なくとも30程度の担い手グループ（約150～200名）を育成していく。

2 継続可能な運営体制

新しいひとはくは、担い手の参画を増やすことにより、博物館スタッフは現状の範囲内を基本に人員を配置する。

その中で、博物館スタッフについては、担い手の育成とサポート等の担い手対応体制を強化するとともに、県民の学習ニーズを把握し、新しいひとはくの活動を県民に伝えるために、本格的にマーケティング・プロモーションを推進する広報・営業体制を強化することが必要である。

(1) 担い手サポート体制の構築

担い手の育成を効果的に進めるためには、演示プログラムを統括し、担い手をサポートすると同時に、民間や各種施設との連携が不可欠である。そこで、担い手の育成に応じて段階的に担い手を受け入れ、サポートする体制を構築する。

(2) 効果的な広報・営業体制の構築

未体験者の誘引、学校教育の支援、家族客のケア、担い手の育成等を効果的に推進するには、博物館の動きをライブで伝え、フォローしていくことによって、きちんと情報をターゲットに届けていく広報・営業が不可欠である。

また、リサーチプロジェクト（＝県民と協働で実施する自然・環境調査）等の県民をまきこむプロジェクトを実施し、ロコミ効果を伴う広報活動を推進する。

さらに、学校団体の教員向けガイド等プロモーションツールの開発・提供も必要となる。こうした広報・営業活動を推進するために、広報・営業部門の強化を図る。

3 今後検討すべき課題

これまでの統計データや経験から、ひとはくを利用する来館者には季節ごと、曜日ごとの変動が大きいことが判明している。

担い手による連携の増加を進めるとしても、限られた人的資源を効率的に運用するため、今後、新館建設が具体化するに当たっては、曜日ごとの変動、季節ごとの変動に合わせた開館時間、開館エリアの設定等について検討する必要がある。

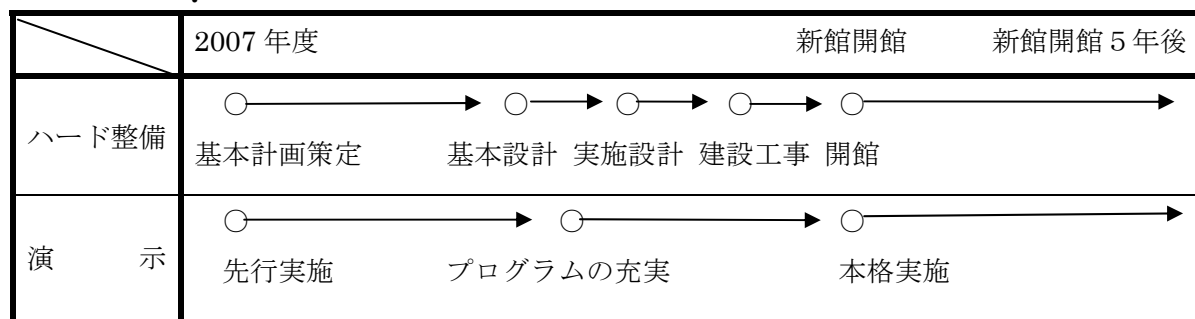
また、ひとはくでは、これまで事務系と研究系が協働して事業推進及びマネジメントに当たるといふ、他の博物館では類を見ない取り組みを進めてきた。これは、例えば研究員が不慣れな事務手続きをすることにより、個々の事業レベルでは効率性等でマイナスとなることもあるが、館全体の総合力アップ、活力の維持という点で優れた方式であったと評価できる。今後も基本的には、この方式を継承しつつ、継続可能な運営体制については、ソフト先行事業実施状況、担い手の育成状況を踏まえつつ、引き続き検討する。

VI 今後の進め方

本計画は、これまでひとはくが実施してきた活動を基盤とし、その実績を踏まえてさらに発展させるために策定するものであり、ハード整備については、今後の行財政構造改革との整合性を図りながら進める必要がある。しかし、ソフト整備については、ハードの円滑な運営のためにも先行的に進めていくことが望ましい。こうした考え方にもとづき、今後の事業展開の中で演示及びそれにもとづく担い手の育成の推進を図る。

来年度予定されているフェアブル展では、昆虫を素材として、中長期的プロジェクトである丹波恐竜プロジェクトでは恐竜を素材として、演示の考え方を導入したプログラムを実施する。また、昆虫標本製作や化石クリーニング作業やその解説などの事業を通して担い手の育成を図る。さらに、来年度の環境大臣会合と連動しつつ、生物多様性と気候変動をテーマに、リサーチプロジェクトを通じた演示プログラム開発等を通じて、アウトリーチ事業での担い手の育成に結びつけていく（P. 15 参照）。

同時に、ひとはく未体験者の誘引の観点から、神戸地域等において県民まきこみ型事業を含む広報・営業活動を展開する。



(参考) 新たな「人と自然の博物館基本計画」策定委員会

委員について

鳴海 邦碩	大阪大学大学院教授 (※)	都市計画
井島 真知	林原自然科学博物館エデュケーター	生涯学習
上甫木昭春	大阪府立大学大学院教授	地域生態
佐藤友美子	サントリ一次世代研究所部長	文化
清水 文美	県民 (博物館ボランティア)	ボランティア
高原 浩之	(株)HTA デザイン事務所代表取締役 (※)	建築
日高 敏隆	京都大学名誉教授(※)	動物学
福島 祥行	大阪市立大学大学院准教授 (※)	演劇
村井 良子	(有)プランニング・ラボ代表取締役	ミュージアムマネジメント
山下 治子	(株)アム・プロモーション取締役	博物館メディア
岩槻 邦男	人と自然の博物館館長 (※)	自然史
伊藤 聡	兵庫県教育委員会教育次長	行政

※ 新たな「人と自然の博物館基本構想」策定委員

策定委員会開催について

第1回 (平成19年7月20日) : 基本構想の骨子、基本計画検討スケジュール確認
後、主に次の点を協議

- ①基本構想の内容の再確認
- ②新たな参加体験型の展示手法である「演示」

第2回 (平成19年10月8日) : 基本計画の構成を提示した後、主に次の点を協議

- ①演示とその具体事例
- ②その前提となる基本的な考え方
- ③それらを実現するための施設計画

第3回 (平成20年2月20日) : 新たな「人と自然の博物館基本計画」最終案

- ①演示を中心とした事業活動計画について
- ②運営方針、今後の進め方について

平成20年3月 新たな「人と自然の博物館基本計画」策定